

牧師室から (2021.1.17)

何年前かの寒い冬の大阪での重い記憶である。

クリスマスになると、キリスト教関係の施設のいくつかに教会から献金をしていた。

そこで、献金だけではなく、行けるところは実際に行ってみてその活動などを見て来るのも良いのではないかという話もあり、私たち二人の牧師と長老一人が、大阪のあいりん地区にある慈善団体施設を訪問することとなった。あいりん地区は大阪の人なら、大勢の人が知っていて、弱い立場の人々の寄せ場のようなところである。日雇い労働者やホームレスの人々が集まり、近くに売春のところもあったようで、名は知っていてもそこに入ろうとしない人が多い。ホテルの安さで外国からの観光客がいるようだが。

仕事もなくなり、身を寄せる家も家族もない、そのゆえ、健康もよくないのに道端で寝るしかない人たちに、毎週何回か炊き出しの食事を提供したり、服や日用品を配ったり、日頃の世話を心にかけているところがあり、そこに行くことにした。

最寄り駅の階段を降りるところから雰囲気の大きな変化に驚くほどである。駅の向う側に今でも壁のセメントが剥がれ落ちそうな大きな建物があり(確かではないが労働者会館だったと思う)、その前に酒瓶を持って横たわっている人たちが何人かいた。そこから連なる建物や道の景色、そして通りすぎる人たちの姿に、戸惑いを感じながら歩いた。寒い中、灰色の空は悲しい気持ちに恐怖感さえ感じさせていたのを覚えている。

その時だった。小学校一年か、二年生くらいの女の子が制服に赤いランドセルを背負って歩いていた。その子は、室内靴が入っているだろうと思われる細長い布カバンを揺らしながら、楽しそうに歌っていた。私は立ち止まって、その可愛い女の子の姿を見つめていた。灰色の景色に浮かんでいるように見える赤いランドセルと歌声が消えるまで。

施設の方との最後の挨拶の時にその話をしたら、その方は言った。「人々は、ここは怖いところ、犯罪の巣のように言いますが、違います。その女の子の姿がもの語るように、ここのおっちゃんたちはみんな優しく、多分自分の子ども、孫のように接してくれるでしょう。人情溢れるいいところですよ。」

帰りはなぜか心の底から泣いていた。悲しいのか、嬉しいのか、複雑な気持ちで。

だんだん開発が進み、あいりん地区が狭くなり、近くには大阪一番の高さを誇るビルが建てられた。今はコロナまで重なり、その冬はもっと寒くなっているのに違いない。その女の子は今も歌っているのだろうか。

(鈴木善姫牧師)